

平成 25 年度 第 2 回狩猟鳥獣のモニタリングのあり方検討会（哺乳類）
議事概要

日時：平成 25 年 11 月 8 日（金）10:00-12:00
場所：（一財）自然環境研究センター 7 階会議室

議事（1）. 狩猟獣モニタリングに係るアンケート調査結果について

解析方法について

- ・ 1983 年以前に狩猟免許を取得した人が大多数であり、社会状況等も異なることから免許取得年を 1983 年以前と 2007 年以後で比較すべき項目は分けてアンケート解析を行った方がよい。（羽澄）
- ・ 資料 6 の各種の生息数について、「増えた」、「変わらない」、「減った」の回答のうち、回答数が多いものを代表値として都道府県別の生息動向図を作成するのは、実状を反映していない可能性がある。（石井）
- ・ 資料 5、2 ページの図はパーセント表示になっているが、回答数をそれぞれ書いておいた方がよい。（羽澄）
- ・ 今回のアンケート結果は個人の回答と、支部全体の回答が混ざっている可能性があることも分析上問題。（羽澄）

アンケートの精度について

- ・ アンケートは個人の主観評価であるため、精度は高くないものである。（三浦）
- ・ 以前より捕獲できない理由を「獲物が減った」と回答している中には、捕獲できないことに対する言い訳的理由も含まれている可能性がある。（羽澄）
- ・ 昔ほど狩猟者は山に入らなくなっているだけでなく、高齢化により小さな野生動物を見つけられていない可能性もある。このため、目撃頻度によって動物の生息動向を評価することは不確実性が高い。（羽澄）
- ・ 狩猟者の能力が一定であれば、過去との比較にも意味があるが、高齢化などに伴って能力に変化があると比較データとしての有効性が低くなる。（羽澄）
- ・ 見かける頻度が「増えた」という回答は、「減った」よりも信頼性が高いかもしれない。（羽澄）

アンケート結果について

- 全体について
 - ・ アンケートの結果は、種を間違えて報告しているケースも含んでいるも

のとして扱う必要がある。(石井)

- ・ アナグマとハクビシン、シマリスとニホンリス、クリハラリスなど、種の識別が正確にできず回答している可能性がある。(三浦)
- ・ アンケートの結果ではウサギが減っていて、アナグマ、キツネ、タヌキは増えているということだが、アナグマは有害捕獲数も増加しており、今回の結果はこれまでの感覚と大きなズレはないと思われる。(石井)
- ・ 今回のアンケート結果から、捕獲数が減少しているのは、狩猟者数の減少に比例しているということだけでなく、狩猟者の獲る意欲と出猟する行動そのものが減少していることが明らかになったと思う。狩猟の圧力は減る一方だということと言えるのではないだろうか。(環境省：松尾)
ウサギ以外は、基本的にはもう狩猟鳥獣としての対象ではなくなりつつあるという傾向が、はっきりと出ている。(三浦)
今回調査した中型哺乳類は捕獲数が減少しているが、生息数が急激に減少しているわけではない、という事はある程度言えると思う。(石井)
- ・ 今回調査した中型哺乳類は、狩猟数が減少しているが、生息数が急激に減少しているわけではない、という事がある程度示されたが、生息動向を把握するためには、狩猟者を対象としたアンケートの他に新しい手法を確立しなければならないという意見でよろしいか。(事務局：黒崎)
生息数が減っているかどうかは、自然環境保全基礎調査等で調査するしかないのではないか。今後、趣味の狩猟者が急減していくのであれば、猟友会を対象とした狩猟獣の生息状況アンケート調査は成立しなくなる。(羽澄)

➤ シマリスについて

- ・ 被害軽減のためにシマリスを捕獲するという回答が、合点がいかない。シマリスと間違えてニホンリスを捕獲していたとしたら問題。(三浦)
シマリスについては、回答内容の詳細な分析と実態を調査する必要がありそう。(事務局：常田)
- ・ クリハラリスのことを書いたケースもあるかもしれない。(石井)
本州、四国、九州は本来シマリスが生息していないので、「生息なし」という項目を作っておけば混乱がなかったのかもしれない。(石井)

➤ ノウサギについて

- ・ ノウサギについては生息数が減少しているという回答が多い一方、本来の狩猟獣としての魅力(毛皮、肉、ゲーム性)が保たれていると判断できる。それ以外は、被害防除としての捕獲に移行しており、狩猟獣としての魅力はなくなりつつある。(三浦)

銃猟で捕獲しているのはノウサギぐらいで、他の中型哺乳類は弾代がもたないないので撃たないと聞く。有害捕獲として箱わな中心の捕獲が行われている。(事務局：黒崎)

- その他アンケート結果について
 - ・ アナグマは肉を目的とした狩猟需要はあるようだ。(三浦)
 - ・ 鳥類の方が狩猟対象として魅力が維持されている。(石井)
- ハクビシンについて(今回アンケート対象外)
 - ・ ハクビシンやアライグマといった外来種の増加により、ニッチを争う在来中型動物種の分布がどうなるかを調査した方が良い。(羽澄)
 - ・ ハクビシンは全国的な生息状況調査は行われていない。(事務局：常田)
 - ・ ハクビシンは有害捕獲のデータがあるので、それで代いたいは把握できるのでは。(羽澄)
 - ・ ハクビシンが外来種であることは、既存の資料で示されており、遺伝子集団の分布の仕方などを示すことで、断定は難しくない。(石井)
 - ・ ハクビシンが外来種であることを、正式に認定しないといけない。基礎データはあるので、補完データで判定可能だと思われる。(三浦)

議事(2). その他

- ・ ハクビシン(外来種かどうか、被害の増加の観点から)、シマリス、ノウサギについては確度の高い調査をすべきである。他の種は、現状では資源管理のための捕獲制限等の検討はしなくても良いと思う。(石井)
前回までの議論では、ハクビシンは有害鳥獣捕獲数が多く、捕獲位置情報も把握されているので、現時点では調査対象としないという事だった。環境省と相談しながら、既存の情報を整理する。(事務局：黒崎)
まずは、ハクビシンが外来種か判定した上で、特定外来生物に指定するか検討する必要がある。(三浦)
ハクビシンを狩猟獣として管理するか、外来種として管理するかを明らかにすべき。(石井)